

昭和58年編

ここからは年度別に観戦記を載せていきます。

きら星のごとく登場する世界のスター達の活躍の目撃談です。

1 1983年4月4日 新日本プロレス 蔵前国技館大会

アントニオ猪木対ラッシャー木村

藤波辰巳対長州力

小林邦明対ダイナマイト・キッド

S58年は全日派のはずの千里眼がなぜか新日ばかり観戦しているが、理由のひとつに日曜の開催というのがあげられる。勤め人にはうれしい配慮といえよう。いまじゃ日曜のドーム開催なんて当たり前ではあるが。

で、試合は何といても藤波対長州、名勝負数え歌「長州初勝利ヴァージョン」を見たということに尽きる。

大方の予想はこの日、藤波が勝って抗争に決着をつけるだろうという当たり前なもの。ところが当時としては大番狂わせの長州勝利で、これがなければジャパンプロレスも新日対UインターもWJも無かったわけだ。

ところで千里眼がやや驚いたのは、ストロングスタイルのはずの新日の前座で「永源・荒川対藤原・栗栖」というお笑いプロレスが展開されたこと。後の悪役商会対ファミリー軍団の原点って実はこのあたりの時代に組まれた新日の前座タッグマッチあたりがそれだったんだろうか。

2 1983年8月4日 新日本プロレス 蔵前国技館大会

藤波辰巳対長州力

タイガーマスク対寺西勇

ラッシャー木村対アニマル浜口

たしかディック・マードックなんかも出ていたはずなんだが、このころの新日は外人の影が薄い。木村対浜口は悲しい同士討ちだった。どっちが勝っても新日にはキズがつかないわけだし、どっちが負けても旧国際プロレスにはキズがつく。このころはそういうマッチメイクが目についたような気がする。

佐山タイガーはこの日が新日ラストマッチ。つまり水面下でクーデター騒ぎがあった時代。防衛戦の相手も寺西っていうのはちょっと格が落ちるなあ、という感じだった。藤波対長州はこのころになるとどっちが勝ってもけりはつきずらい状態。つまり煮詰まっちゃっていた。全日の名物カードはたいへん息が長い（テリー対ブッチャーなん

• • •

ていまだにやってる！) が新日のは正味期限が短い。このあたりの空気を察した長州は猪木への挑戦を睨んだ闘いになり、藤波はクーデターに忙しい。試合は藤波のリングアウト勝ち。当然、明確な決着は付かない。

3 1983年11月3日 新日本プロレス 蔵前国技館大会

綱引き4対4マッチ

アントニオ猪木対谷津嘉章

藤波辰巳対キラーカーン

坂口征二対アニマル浜口

前田日明対長州力

コブラ対デービーボーイ・スミス

高田・山崎対小林・寺西

ポール・オールドーフ対栗栖正信

木戸・剛対B・J・スタッド スティープ・ライト

文化の日はプロレスの日、だったんだなあ。千里眼はこの日、休日出勤。はやめに仕事が片付いたところで「そうだ、蔵前で新日やってるはず」ということでふらりと参戦。ところがこれがものすごい試合の連続で大満足。

まずは当時、大ブームの新日はふらりと一見の客は長蛇の列に並ばないと当日券が買えない。しかもこの日はもう当日券すらない状況。キャンセル待ちの列に千里眼は並んだ。「ただいま2階席が4枚でました！あと2枚リングサイド席がありました！」などと新日の営業マンと思われる男性の緊張感一杯の声。後の話では最後は紙切れに「立ち見1000円」と書いたものまで売り出したとか。

千里眼は2階席5000円をゲット。会場入りしてびっくり。なんと通路にまで客がいっぱいでなかなか自分の席までたどりつけない！席についても「なんで立ち見の奴等が通路とはいえおれより前でみてるんだ」という素朴な疑問でいっぱいだった。そんな不満も男の熱気むんむんの館内にかき消され、試合は開始早々なをやって「ウォー」「ドー」「アー」の連続。4対4は谷津コール以外は全選手のコールが試合の度に両国橋あたりまで響いたとか。

試合内容ではスティープ・ライトの欧州スタイルのリストロックからの脱出にどよめきが起こったりオールドーフの秒殺マッチにため息が漏れた。そして登場したのが若き日の高田のノブ君と山ちゃんの今風にいえばヤングライオンコンビ。おそらくこのタッグマッチがふたりの出世試合だろう。単なる若手の「ギロチンドロップとニー

ドロップの6連発」という維新軍ジュニアコンビへの大反撃で場内の興奮はレッドゾーンに突入した。

まああまりに興奮しすぎるとそれはそれでまずい。というわけで酔い覚ましの役割を担うはめになったのがコブラ。佐山タイガーの後がまという役はジョージ高野でなくとも重過ぎたということはあるだろう。

綱引きマッチというのは本当に綱引きやって勝敗決めようというんじゃなくて対戦相手を引き当てるというしくみ。だから当日まで誰と誰が闘うかわからないというのがこの日の売り。つまりくじ運次第で長州対猪木もありえたわけ。

ただ2階席あたりじゃ長州対前田は好評だった記憶がある。千里眼は長州は勝たなきゃいけない試合だが前田にフォール勝ちするわけにもいかないだろう。どうするんだろう、という見方だったので、精一杯がんばった後サソリ固めでギブアップは意外にいい結末だったかな、と思った。ただそのあとの藤波の試合はほとんど気力が感じられない消化試合。猪木と谷津は“格”が違いすぎた。

興行全体の異様な盛り上がりというのは千里眼は初めて体験した。これが新日だな、と実感したしこれが次に何時あるのかは、何回も観戦しないと行き当たらないとも実感し、いよいよプロレスにのめり込んでいったものである。

4 1983年12月 新日本プロレス 蔵前国技館大会

アントニオ猪木 ハルク・ホーガン対ディック・マードック アドリアン・アドニス
藤波・木村・前田対長州・浜口・谷津

いわゆる年末タッグ戦争というやつでこの年は全日と新日の両方を見比べたわけ。ホーガン、マードックの他に超大物アンドレ・ザ・ジャイアントもこの日は出場していた。この日の決勝戦にアンドレチームが出場できなかったのはパートナーの“S”ハンセンが弱かったから。この“S”が曲者。スタンじゃなくてスウェード・ハンセン。タッグ屋ではあったが(リップ・ホークとスウェード・ハンセンは有名なコンビ)さすがにご老体すぎた。

しかし外人スター総動員のわりには盛り上がりには欠ける興行。一番盛り上がった試合は日本人同士の6人タッグだった。その日本人抗争路線が全面に出てくるのが翌年の2月の蔵前でこれがまた大爆発の興行になる。

5 1983年12月12日 全二本プロレス 蔵前国技館大会

鶴田 天龍対ハンセン プロディ

馬場 D・F・ジュニア対T・J・シン 上田馬之助

グレート・カブキ対リック・フレアー

三沢 淵対石川 ウルトラセブン

菅原対冬木 越中対後藤

全日の伝統の世界最強タッグリーグ戦。さすがにこれだけは新日に負けないものがあつた。会場もまずまずの入りで最終的には超満員だった記憶がある。

人気の秘訣は全日得意の豪華外人総動員作戦。81年の10周年歳前もそうだったしテレビで見たオープン選手権の開幕もそうだったが、豪華とはこういうもんだ、というのをジャイアント馬場は見せ付けた。観客にも猪木にも、そして千里眼にも。この日はこのほかに駄目押しでミル・マスカラスも登場した。駄目押しのマスカラスというのは馬場の得意のカードだったようで、81年の歳前、85年の両国、そして01年のドーム（まあ01年は馬場本人はこの世にはいなかったが一周忌試合だった）と繰り返された。

前座で若手が多数出場していた。新日に比べてこの部分の層が極端に薄いというのが全日の弱みだったが地道に育成してなんとかこの時期には数が揃ってきた。その中にはダイヤモンドの原石、三沢光晴やら結局は単なる砂利石だった菅原伸義などが混じっていた。